博士学位論文審査要旨

２０１２年7月２４日

論 文 題 目： アメリカ映画とキリスト教—110年の関係史に関する学際神学研究—
学位申請者： 木谷 佳楠
審 査 委 員：
主 査： 神学研究科 教授 水谷 誠
副 査： 神学研究科 教授 関谷 直人
副 査： 同志社大学名誉教授 野本 真也

要 旨：

神学における学際研究の中で「文化の神学」への関心は非常に高く、F. シュライアマハー、H. R. ニーバー、P. ティリッヒなどによってその枠組みが提示され、構築の努力が続けられてきた。しかし、具体的な個々の文化を対象とした研究となるとそれほど多くはない。

本論文はそうした中でアメリカ合衆国のキリスト教と文化との関係を歴史神学的に考察するために、その具体的事例として、アメリカが生み出した文化の中で最も際立ったもののひとつである映画文化を取り上げ映画とキリスト教が歴史的にどのような関係にあったかを明らかにすることを目的としたきわめて独創的、意欲的な労作である。

アメリカでは近年、映画とキリスト教に関する重要な研究が発表されている。しかし、それらの先行研究の多くは神学的に保守的なもの、神学的テーマに沿った映画の恣意的な解釈やミクロの視点からの関係を追究したものであり、通時的な歴史神学的考察をおこなった研究はほとんど見当たらず日本においては皆無と言ってよい。本研究が2011年度日本学術振興会特別研究として選定されたのも、本研究を推進する意義が認められたからであろう。

キリスト教はアメリカの「見えざる国教」であると言われているが、教会・教派は実に多種多様であり、神学も同様である。したがって、キリスト教と文化との関係も複雑きわまりない。それだけに、文化芸術の表現手段としての映画をモチーフとして両者の関係を歴史的に追究することは、アメリカ・キリスト教史の重要な側面を明らかにするとともに、キリスト教そのもののあり方への神学的省察と示唆を得ることになる。

このような学際神学的・歴史神学的意図のもとに、本論文は映画が誕生した1890年代から2001年9月11日前後まで約110年の歴史を、映画界とキリスト教のエポック・メーキングな出来事を中心に据えながら、6章に分けて詳細な考察をおこなっている。

まず第1章では、ユダヤ系ヨーロッパ人映画制作者たちがハリウッドという巨大産業を成長させていったことで、彼らがキリスト教世界から非難を受け、アメリカに同化していかざるを得なかった過程を追跡し、第2章では、1930年代にハリウッド映画が自主検閲機関設置によりキリスト教的価値観に基づいて制作されるようになった経緯を明らかにしている。

第3章では、冷戦時代において「神を否定する共産主義者」に対して「赤狩り」がおこなわれたため、ハリウッドでは聖書を題材にした娯楽大作が次々と制作されるなど、有神論に基づくアメリカ人としてのアイデンティティが社会的に強制されることによって、「見えざる国教」もまたユダヤ・キリスト教的道徳観・価値観へと変容していったことを検証している。

第4章では、1960年代からアメリカ社会のリベラル化が進むとともにキリスト教の世俗化・非宗教化現象が生じ、ジーザス・ムーブメントが盛んになる中で、ハリウッド映画界もイエスの人

間性を強調する映画を制作するようになったことを明らかにし、そのキリスト論的な神学的意義を考察している。

第5章では、アメリカの急進的なリベラル化の反動として大衆伝道者が登場し、アメリカ社会の保守化が進んでいく一方で、スコセッシ監督の「最後の誘惑」が福音派とリベラル派の間に「文化戦争」を引き起こした状況を分析し、伝統的教義から逸脱する仕方であっても敬虔な信仰を表現し得る映画の可能性について検討を加えている。

第6章では、9.11以降、国際社会がアメリカ対テロリスト、ユダヤ・キリスト教対イスラームという対立構造を顕在化させる中で、アメリカ国内では福音派を中心とした保守派とリベラル派の対立が激化していくが、それ以前から制作されていた「ディザスター映画」がすでに福音派の終末思想の影響を受けていること、またそれらが反対にテロ事件に影響を与えた可能性や戦意高揚のための利用の是非が問題となった経緯を明らかにし、いかに「ディザスター映画」が福音派の終末思想に基づいて制作されているかを詳述している。

以上のように、本論文は文化芸術の表現手段としての映画がアメリカのキリスト教とどのような関係にあるのかを歴史的に考察し、その結果、キリスト教神学の根本問題である神論が「赤狩り」までの時代には有神論と無神論の対立という形で、またキリスト論が「ヒッピー」時代にはキリストの神性と人性、生と死と復活をめぐる論争という形で、さらに終末論が「福音派」時代には世界終末、千年王国、破滅と救済、神の国に関する闘争という形で、約110年の歴史の表層に浮かび上がっていることを確認するという重要な成果を得ている。そして、この成果をもとに、キリスト教が神学的に福音派（保守派・原理主義）対リベラル派というふうに単純化されて歴史社会の現実に作動していくことの危険性と、また多種多様な教会・教派の神学と諸活動への批判的検証の必要性を指摘し、さらに神学が本質的に神と人間、人間と人間の交わりの関係を取り扱うことから、コミュニケーション・ツールとしての映画の特質を活かした今日の実践神学的課題を提示している。

個々の論点では、さらなる詳細な探究と緻密な論考の展開を必要とする箇所も散見されるが、本論文は総じて「文化と神学」の関係について映画とその歴史を題材に追究した学際神学的・歴史神学的研究として十分な内容を有しており、博士（神学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものと認められる。

総合試験結果の要旨

２０１２年7月２４日

論 文 題 目：　アメリカ映画とキリスト教—110年の関係史に関する学際神学研究—
学位申請者：　木谷　佳楠
審 査 委 員：
　主　査：　神学研究科　教授　　水谷　　誠
　副　査：　神学研究科　教授　　関谷　直人
　副　査：　同志社大学名誉教授　野本　真也

要　　旨：

木谷佳楠氏は、2009年3月に同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、同年4月に後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たすと共に、学位論文を提出した。2012年7月24日13時から、およそ2時間にわたって神学研究科委員会は総合試験を実施し、木谷氏から十分な歴史神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有していることを確認した。研究に必要な語学力（英語、ドイツ語）は、引用文献を駆使していることからも明らかなように、十分に有していることを確認した。

以上の結果により、総合試験に合格であると認める。

博 士 学 位 論 文 要 旨

論文題目：アメリカ映画とキリスト教—110年の関係史に関する学際神学研究—

氏　　名：木谷 佳楠

要　　旨：

神学における学際研究の中で「文化の神学」への関心は非常に高く、F・D・E・シュライアマハー、H・R・ニーバー、P・ティリッヒなど近現代の著名なプロテスタント神学者によってその枠組みが提示され、構築の努力が続けられてきた。しかし、具体的な個々の文化を対象とした研究となると、それほど多くはない。近年ではアメリカ合衆国において特に「宗教と映画」に関する研究が活発になってきており、映画を通して宗教を捉え直す試みがなされているが、アメリカ映画とキリスト教について特化し、両者の関係について通史的にかつ神学的に論じた論文は英語圏でも未だ存在していないのが現状である。従って、本研究は映画とキリスト教における約110年の関係史を、ニーバーやティリッヒらが提唱した「文化と神学」という学際神学研究の枠組みの中で捉え、それを歴史叙述的に考察することを目的としている。

そもそも、アメリカにおける映画文化は約110年前に誕生してから現在に至るまで、キリスト教と不可分の形で発展してきた。映画界はその不可分なパートナーであるキリスト教界と時に対立し、時に強調し、映画表象もそのときどきの神学的動向や教会を取り巻く状況に連動する形で変化を遂げてきたのである。むろんアメリカは「宗教国家」を標榜しておらず、 自由・平等・民主主義を基本理念としている。加えて、アメリカ合衆国憲法修正第1条では、信教の自由、並びに言論・報道の自由を保証する際に、連邦議会が芸術やマス・メディア、あるいは政治の領域において、特定の宗教の教義を持ち込むことを禁じているのである。そうであれば、理念的には宗教的な自由も当然保証されており、特定の宗教が国家のありかたに関与することはないはずなのである。

それでは、自由・平等・民主主義が基本理念であるアメリカで制作される映画において、憲法修正第1条で守られた信教の自由、言論の自由は本当に有効なのであろうか。本研究はこの問いを外枠として、アメリカ映画とキリスト教の関係史の展開を6つの時代に分け、次の3点に焦点を絞っている。

(1) 一般に「表現の自由」が守られていると見なされているアメリカ映画において、キリスト教的倫理観がいかにその内容に対して影響力を与えてきたのか。

(2) 時代ごとの神学的傾向の変化がいかに映画表現のありかたを操作してきたのか。

(3) アメリカの大衆文化である映画とキリスト教という宗教の関係性を日本で神学的に研究することの意義はどこにあるのか。

以上3点の問いに対する答えを模索するにあたり、本研究はアメリカにおける時代ごとのキリスト教神学の根本問題である神論、キリスト論、終末論に対する捉え方の変遷を追いながら、一方で、その絶えず変化し続ける時代の流れの中で、映画という媒体と、それを受容する我々の間において、時を超越して生きて働かれる神が一体どこに立ち、我々に語りかけているのか、ということを模索する作業も試みている。

各章ごとの内容要旨は次の通りである。

序章においては、森孝一やマーク・A・ノールが政治や人種問題にキリスト教が影響力を与えることでアメリカという国を形成してきた、という主張を踏まえた上で、実はアメリカにおいては、政治や人種の領域のみならず、文化の領域においてもキリスト教あるいは森が定義する極めてキリスト教的価値観近いアメリカ独自の包括的な宗教である「見え

ざる国教」がその形成に大きな影響を与えてきたのではないか、という問題の所在を設定した。

第 1 章では、1890 年代から 1910 年にかけて、白人のアングロサクソン系プロテスタント信徒であるトーマス・エジソンやエドウィン・S・ポーターを中心として開発が進められてきた映像技術が、やがて彼らの手から「非アメリカ人」であるユダヤ人劇場主たちの手に渡る経緯を概説した。そして、ユダヤ人劇場主たちがハリウッドという巨大産業を成長させていったことで、反ユダヤ主義的感情を背景にした一部のキリスト教世界から非難を受けるようになり、アメリカに同化していかざるを得なかった過程を追跡している。

第 2 章においては、1930 年代に激しさを増したキリスト教世界からの抗議への対処として、ハリウッドのユダヤ人映画製作者たちが映画業界内に自主検閲機関として MPPDA（アメリカ映画製作者配給者協会）を設立し、全ての映画をカトリック的な価値観に沿って制作していくことを選ぶことになった経緯を論じた。

第 3 章では、冷戦時代の国際政治における対立状況の中で「神を否定する共産主義者」に対して「赤狩り」がおこなわれたため、ハリウッドでは聖書を題材にした娯楽大作が次々と制作されるなど、有神論に基づくアメリカ人としてのアイデンティティーが社会的に強制されることによって、「見えざる国教」もまたユダヤ・キリスト教的道徳観・価値観へと変容していったことを検証している。

第 4 章では、1960 年代からアメリカ社会のリベラル化が進むとともにキリスト教の世俗化・非宗教化現象が生じ、ジーザス・ムーブメントが盛んになる中で、ハリウッド映画界もイエスの人間性を強調する新しいイエス像を描く映画を作成するようになったことを明らかにし、そのキリスト論的な神学的意義を考察している。

第 5 章では、アメリカの急進的なリベラル化の反動として大衆伝道者が登場し、ジーザス・ムーブメントが福音派のリバイバル運動へと吸収合併され、アメリカ社会の保守化が進んでいくが、そうした中で「アメリカン・ニュー・シネマ」が短命に終わり、スコセッシ監督の『最後の誘惑』が福音派とリベラル派の間に「文化戦争」を引き起こした状況を分析し、伝統的教義から逸脱する仕方であっても敬虔な信仰を表現し得る映画の可能性について検討を加えている。

第 6 章では、9.11 以降、国際社会がアメリカ対テロリスト、ユダヤ・キリスト教対イスラームという対立構造を顕在化する中で、アメリカ国内では福音派を中心とした保守派とリベラル派の対立が激化していくが、それ以前から制作されていた世界の破滅を描く「ディザスター映画」がすでに福音派の終末思想の影響を受けていること、また反対にテロ事件へ影響を与えた可能性や戦意高揚のための利用の是非が問題となった経緯などを明らかにし、いかに「ディザスター映画」が福音派の終末思想に基づいて制作されているかを代表的な作品を取り上げて詳述している。

終章においては、各章で明らかにされたことを要約し、本論文は文化芸術の表現手段としての映画がアメリカのキリスト教とどのような関係にあるのかを歴史的に考察し、その結果、キリスト教神学の根本問題である神論が「赤狩り」までの時代には有神論と無神論の対立という形で、またキリスト論が「ヒッピー」時代にはキリストの神性と人性、生と死と復活をめぐる論争という形で、さらに終末論が「福音派」時代には世界終末、千年王国、破滅と救済、神の国に関する闘争という形で、約 110 年の歴史の表層に浮かび上がっていることを確認している。

そして、この成果をもとに、本論文はキリスト教が神学的に福音派（保守派・原理主義）対リベラル派というふうに単純化されて歴史社会の現実に作動していくことの危険性と、また多種多様な教会・教派の神学と諸活動への批判的検証の必要性を指摘し、さらに神学が本質的に神と人間、人間と人間の交わりの関係を取り扱うことから、コミュニケーション・ツールとしての映画の特質を活かした今日の実践神学的課題を提示している。